

旧富岡製糸場西置繭所

正会員 齋 賀 英二郎 殿
正会員 齋 藤 英 俊 殿
正会員 木 村 勉 殿

富岡製糸場が世界文化遺産に登録されたのと同じ 2014 年に国宝指定を受けた建造物のひとつ「西置繭所」の保存活用プロジェクトである。

ここでの保存は、木造社寺建築の修理事業などとはさまざまな点で大きく異なっている。まず価値の定義が違う。オリジナルへの復元ではなく、一世紀以上に及ぶたびたびの工場再編のなかで建物に刻まれた経験の履歴を、躯体や開口部の多重的な痕跡から台車の傷跡やメモ書きなどに至るまですべて尊重する方向性が選ばれた。そもそも東アジア世界で長い時間をかけ洗練された木構造のシステムではなく、性急な西欧化と殖産興業政策のもとで産み出された未熟なハイブリッドな構造であり、解体すれば多くを失うことになり、史蹟指定ゆえに地盤改変が許されず免震の選択もない。こうしたさまざまな制約条件の下、多彩な補強要素が既存建物とともに柔らかな全体をなすように工夫された構造的解法が漸次追加された。断熱も気密もないに等しい建物に世界各地からの人々を招き、地域住民の活動を迎えることで、歴史資産を維持してゆくための財政的体制を整えることも重要であった。

翻ってみれば、これまで文化財建造物の保存設計は、原型への還元を旨とする傾向があり、デザインとは異質な専門的な閉域とみなされがちであった。しかし、この作品では建物の履歴と持続の条件をいずれも否定せず抱擁する思想へと舵が切られ、そのうえに創造的なデザインの可能性が探求・検証されてきた。選考部会では、本作品をこうした観点から「作品」として評価することとした。

木骨煉瓦造建物の内部にハウス・イン・ハウスの形式で挿入された鉄とガラスの筒が、無数の素材が興味の尽きない物語を蔵して折り重なる状態そのままに、国宝建物を支えている。ガラス越しの経験には賛否両論あろう。日本では稀有な複合的保存も海外に目を向ければ類例は少なくなかろう。それでも、新しい保存思想が国・自治体の関係者や専門家・技術者らによって共有され、高度な水準で具現化されたことは画期的である。今後ますます高度なデザインの判断が問われる近代の建造物の保存再生の試みが増えていくであろうし、そうしたプロジェクトが広く優れた設計者の参画に開かれていくことも重要と考えるが、本作品がそうした未来の起点となることを期待したい。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。